北 杜夫

どくとるマンボウ小辞典

中公文庫

どくとるマンボウ小辞典

定価はカバーに表示してあります。

1974年2月10日初版
1997年7月10日19版

著者 北 杜夫

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1974 CHUOKORON-SHA,INC. / Morio Kita

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-200073-4 C1195 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

どくとるマンボウ小辞典

北　杜夫著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

読書について……九
地下鉄の怪……一三
古代の夢判断……一五
イチョウ……一八
世界パイ戦争……二一
シラミ考……二四
暗黒……二七
解剖……二〇
続 解剖……三三
科学する心……三六
発明家登場……三九
美しい奇妙な蜂……四二
病気の好きな人……四五
人間・この身勝手なもの……四八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

女と男……五一
ふしぎな環礁……五五
蜂に刺される科学……五七
ヴィタミンの話……六〇
キノコの栽培……六四
椰子の葉ずれ……六七
鱗翅のかがやき……七〇
旅行小切手……七三
重力の加速度……七六
海外電話……七九
私の赤ん坊……八三
禁煙のこと……八六
バナナの話……八九
すばらしくない世界……九二
深海へもぐる……九六
欲求不満……九九

食用ガエル……一〇三
地球は丸いか……一〇五
ビールの名……一〇八
ホンマグロ……一一一
黒船きたる……一一四
血液検査……一一七
数学……一二〇
ウェルズの予言……一二四
確率……一二七
飛行機の思出……一二〇
私の第三地区……一三三
竹……一三六
天然痘……一三九
キツネのチャブクロ……一四二
月……一四五
蚊戦争……一四八

夢と創造……一五二
天狗つき……一五四
自己暗示……一五七
育児……一六〇
チンチン氷……一六三
オホーツク海の氷……一六六
マニア……一六九
津波……一七三
春の訪れ……一七五
硫黄……一七八
原っぱの植物……一八一
押葉の標本……一八四
船あれこれ……一八七
泥棒対策……一九〇
解説……奥野健男　一九四

どくとるマンボウ小辞典

読書について

秋には、読書週間とかいうものがある。この世には不思議なものがあるものである。あまり本を読まぬ私のような人間は、なにか刑罰でも受けそうな、うしろめたい気持にさせられる。

いつぞや私は、ある週刊誌の随筆に「私は年に三冊くらいしか本をよまぬ」と書いた。ところが、その週刊誌は某出版社の出版物であったため、そこの部分が巧妙に訂正されてあった。

もちろん、私は年に三冊以上の本をよむ。私はマンガ本も熱心によむ。児童マンガには、大量のフロクがついているので、マンガ本を数えただけで、私は年に数百冊の本をよんでいることになる。(近ごろ、私はあまりマンガをよまぬことにした。私の母が、おまえももう大きいのだから、絵よりも字の書いてある本をよめ、と遺言をしたからだ。もっとも、この母は何年も前から遺言だけはするのだが、未だに死ぬ気配を見せぬ)

しかし、読書という、少し昔かたぎのかりそめならぬ語感を考えると、私は年に三冊の読書をしているかどうか自信がもてぬのである。

中学生のころ、私は神田の古本屋街をよく訪れた。それは受験参考書を買うためであったが、そのほか自然科学の本棚の前にもよく立止った。私は、虫や鳥や草木の本には興味があった。文学なんてものは、およそ読まなかった。漱石の猫と坊ちゃんだけは読み、なかなかおもしろいも

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

のだと思った。だが、私には、人間がつくるものより、自然がつくるもののほうがより偉大だという、ばかにかたくなな幼い観念があったので、ほかの本棚は、およそムダなものだとしか思えなかった。

といって、非常に子供じみた文学書はよんだ。中学校には図書室があり、私はその委員を一年つとめた。もっとも貸出しの多かったのは海野十三著『火星兵団』という書物であったが、みんなが読もうとしても、それはかなえられなかった。委員の私が、何べんもよみかえしていたからである。

あるとき、チビの一年生がきて「そこの、大仏先生の本を」と言った。私が「このダイブツかい？」というと、相手は「いいえ、それはオサラギとよむのです」といい、私はあとで長い間胸がいたんだ。

ところが、旧制の高等学校へはいってみると、みんな多量のあやしげな本を読んでいた。そういうあやしげな本をよんでいないと、会話についていけず、これは実にけしからぬ不埒なことであったが、私は不安の念にかられ、ある小説を思いきって読んでみた。それは私に感銘を与えた。これは大変と思い、私は、みんなの会話に出てくる本を、闇雲によみはじめた。内容なんて問題でなかった。私は手帳によんだ本の題名を記し、今月は二十冊よんだな、と阿呆のようにホッとした。

しかし、私だけが愚かであったわけではない。ある一人の男は、やはり手帳によんだ本の冊数

を記した。遅々として、少しもはかどらぬ。それは、彼をがっかりさせた。むずかしい哲学書だと、ごくいい加減によんでも、一冊よむのに半月かかる。これは割りにあわぬ仕事と思われた。そこで彼は、せめてページ数を記入することにした。ページ数でゆくと、数字はどんどんふえてゆくので、彼は有頂天になり、毎日、自分がどれだけ進歩したか理解できるような気になった。

ついに彼は、もっとすばらしい方法を発明した。つまり活字数でゆく方法である。ちょっと本に目を通しても、たとえ三ページよんでも、計算してみると、それは二千五百字くらいになった。みるみる彼の手帳の数字はふえてゆく。そうなると、また病的な神経になってきて、床屋にはいってグラフ雑誌をながめたとしても、つい手帳に七千四百という数字を記入したくなる。そうなると、本をよんでいる時間よりも、厖大な数字の足し算をしている時間のほうがずっと多くなる。

愚談はおくとして、グーテンベルクがはじめて印刷した書物『聖書』は、一四五四年から翌々年にかけて、マインツで作られた。部数は百五十部で、そのうち三十部は羊皮紙を用い、残りは紙の本である。羊皮紙本は当時の公定価格で一冊犢（こうし）百七十頭で取引きされた。いかに貴重であったかがわかる。

ちかごろ、速読術などという言葉、その訓練の方法の話をきくと、古風な人間である私はカッとなる。そういう習練をする閑があったら一本をよむにこしたことはない。つまらない本に時間をかけるのは愚かなことだし、丹念によまねばならぬ本をすばやくよむのは、さらに愚かなことだ。そういう差別は、種々の本を読むことによってしか覚えられぬものであろう。

地下鉄の怪

東京の地下鉄も次第に発達してきた。あちこちと路線がひろがったばかりか、大きな駅には地下街がつらなり、タコのように四方八方に、地上への回廊が足をのばしている。

私は至って方向オンチで、学術語を用いれば位置の見当識（オリエンテェション）がわるく、従って乗物に乗るときにも、よほど注意しないと肝心の目的地に到達することがむずかしい。

その点、以前は地下鉄というものは、私にとって安全な乗物であった。乗りかえの必要もなければ、外の風景も見えないから、おかしな錯覚を起すおそれもなかった。駅の名前さえ覚えておけば、ちゃんとその地点に到着できたのである。

ところが先年、半年ほど船に乗っていて帰国してすぐあと私は友人と地下鉄に乗った。相手がいるときは私は一切その人にまかせきりだし、新しい地下鉄の路線ができたなどとは露ほども知らない。

「おい、ここで乗りかえだ」と、いきなり友人がいった。

「え、地下鉄を乗りかえるのか？」と、私はびっくりしてきき返した。

ホームの向う側には、なるほど私が見たことのない赤い色に塗られた車輛がとまっており、私はそれに乗りこむとき、なんだか妖しい異国にきたような気持がした。それから「これは大変な

ことになったぞ。地下鉄もこれからうかうか乗れないぞ」と思った。

しかし、その新しい丸ノ内線も、慣れてみればそんなに怖ろしいものではなかった。私はしばしばそれを利用して、新宿へでた。新宿の駅は広かったが、群衆について階段を登ってゆくと、いつも見慣れた街へでることができた。

ところが先日、私は新宿駅を乗りこしてしまった。もっと先まで線路ができたのである。次の駅に着いたとき、私は慌てて、ちょうど反対側のホームにはいってきた車輛にひらりととびのった。するとますます方向ちがいの駅に着いてしまった。

ぶつぶつ言いながらまた電車を乗りかえ、なんとか私は新宿まで戻ってきた。それからいつものように階段を登ったつもりだったが、意外にも変なところへ出た。気を静めて見れば西口のようである。私は東口へ出たかったので、地下道を引返し、いつもの階段を見つけようとした。ところがそれがどうしても見つからないのである。

人々は迷うことなく、ぞろぞろと各方向に歩いてゆく。標示の文字が、ちゃんと出口の名前を示している。にもかかわらず、私はさっきから狼狽しつづけてきたせいもあって、どこがどこやらわからず、しばし途方にくれてあたりを見まわした。すると、この広大な地下道が、次第に不気味なものに映じてきた。一種異様の世界にまぎれこんだという感じである。

そのとき、電光のように、私はある小説のことを思いだした。それは、いわゆるＳＦといわれる分野の、ジャック・フィニイ作『地下三階』という作品であった。

ごくあらすじをいうと、その主人公は、それまで幾百回となく、ニューヨークのグランド・セントラル駅の地下二階から地下鉄にのっていた。ところがあるとき、迷路のようにいりくんだ回廊をなにげなく進んでゆくと、ひょっと、あるはずのない地下三階に出てしまう。そこには人々が列車を待っていたが、一様にひどく古めかしい服装をしている。新聞売場でちらと見ると、売られている新聞は一八九四年、なんと数十年前の日付なのである。

彼が切符を買おうとして金をだすと、出札係がひどくうさんくさげな顔をする。「そいつは、ゼニじゃありませんぜ」なるほど、みんなの使っている紙幣は、すべて旧時代の一倍半もある紙幣なのだ。

主人公は、その場から引返し、次の日、古銭商からたんまり古い貨幣を買いこんで、もう一度その古い時代に通ずる駅へ行こうとする。しかし、あらゆる努力にもかかわらず、地下三階に通ずる回廊を二度と見つけることができない……。

私は急激な不安に襲われた。思いきって新聞売場に歩みより、新聞の日付を確かめてみた。たしかに今日の日付のようである。それでも私の不安は去らず、勇をこして売子に尋ねてみた。

「東口に出る階段はどう行くのですか？」

相手は面倒くさげに、すぐ後方を指さした。なるほど、そこにはちゃんと出口があって、私の常々通る階段のようであった。私はそこを登っていった。私は緊張しながら歩を運んだのだが、べつにチョンマゲをゆっている人物にも会わず、なんのことはないあまりに見なれた街中に出た。

古代の夢判断

夢というものは大体、昔から言われるように「不合理で、根拠なく、奇怪至極」のもの、あるいはそのように思われるシロモノである。

それゆえ科学的な夢の研究書の書きだしにも、いかめしく、詩的な美文調が――悪口をいっているのではない、当然のことである――しばしば見られる。

「われわれは眠りにおちいると、薄暗い古代の影の棲家に入る。覚醒時のあの外界からは、なんら直接な光線を照らしてくれぬ。われわれは自覚的な意欲なしに、その部屋をあちこちと連れて行かれる。われわれは、その黴が生え、朽ちはてた階段をころがりおち、神秘にみちた奥深いところからくる不思議な音や香につきまとわれる。自分たちが意識的にはどうにもできない幻の中を動いているのだ」

これは名高いハブロック・エリスの『夢の世界』の冒頭。

夢というものはたしかにこの通りで、なんだか不可解であやしげで、それゆえにこそ人類の関心の的ともなった。

未開人は、霊魂が肉体から離れてゆき、神々や死者から啓示をうけてくるのが夢だと解釈した。古代人も、たとえばギリシャ人はアポロンの神殿なぞで寝てお告げを受けたし、船乗りは船出の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com